

東海道の名所案内記

藤川 玲満

1. はじめに

近世には、京都・大坂・江戸をはじめ各地で名所案内の書物が作られたが、そのなかで1780年に秋里籬島が著した『都名所図会』が非常に高い評判を得、以後京都周辺の諸国の名所図会が作られた。本発表では、東海道の名所案内記を取り上げてその種類や性質を概観し、その上で『東海道名所図会』（秋里籬島著、1797年刊）について、先行する案内記との違いや籬島の名所図会の発展を辿りながら特質や位置付けを考える。

2. 東海道について

東海道は江戸時代の五街道の一つで、江戸の日本橋から京都の三条大橋に至る。その往来の状況が『東海道名所図会』（注1）に次のようにある。

畿内七道は、天武帝の御時、勅によつて定められ、その中にも東海道その冠首たり。(略) 江府までの往来、貴賤となく老少となく、夜となく昼となく、公卿は勅を蒙りて春の御使、藩屏の諸侯はかはるがはる参勤あり。あるは商人の交易、斗藪の桑門、風騷の歌枕、誹諧の行脚、伊勢まあり、富士詣まで、駅路の鈴の絶間もなく、馬あり、竹輿あり、舟あり、橋あり、泊々は自在にして酒旗所々に翻翻たり。

ここからは様々な身分と用事の人々の往来が絶えない賑やかな街道であったことが窺える。

3. 東海道に関する書物

近世に作られた東海道に関する書物には、主に紀行文、道中記、絵図、仮名草子がある。

(1) 紀行文

東海道の紀行文は、古くは『海道記』（1223年の紀行）など中世から存在する。まず鳥丸光広『春の曙』（注2）（1668年刊）を例に紀行文の特徴を見る。これは著者が左大臣二条康道に伴い、1635年2月に京都から江戸に下った紀行で、次に挙げるのは富士山の麓を通る部分である。

十五日。天晴。

きのふの名残なく空はれて、富士の山、麓まで雲かゝらず、春の雪も消間見えざりし曙也。先々、参かゝりたる人あまた物すれば、御旅宿うちあひ、所せきなれば、「これにけふはやすらはせ給はん」

との御定有つゝ、「さらば、ふじの御当座有べし」とて、御詠、

おもかげのかはるとばかり見るたびにさらにぞむかふふじのしら雪

(略)

愚詠

土峰を見る毎に口号を懸づ
九天霞霽れて仰げば弥高し
莊周曾て曰ふ泰山小なりと
一箇の比倫秋兎毫
八重がすみたちもかくさでふじの山ゆきのよ
そめのさくらさくころ

このように日を追って著者の旅や出来事を記し、道筋の景観を和歌や漢詩に詠み込むのが中世以来の多くの紀行文の特徴である。そのなかで近世中期には貝原益軒『あづま路の記』（注3）（1685年）と谷口重以『吾妻紀行』（注4）（1700年刊）という少し異なる性質の作品が現れている。『あづま路の記』には著者の旅の描写や道中の詠がなく、土地や道筋の名所が解説を交えて書き連ねられる。『吾妻紀行』は著者の旅の形をとるが、道中の人々の言として教訓話が挿入され、著者の詠よりも撰集類や先人の紀行から和歌・漢詩を多く引用し、道中の名所を箇条書に掲出する。先のような典型的な紀行文の一方で、このような名所案内や読み物の性質を強めた紀行の出現も認められる。

(2) 道中記

道中記は旅の途中参照する書物で、年代の確められる最も古いものは1655年の板本とされ、以後江戸時代を通して作られる。形状は一冊の小本あるいは横本である。慮橋堂適志『東海道巡覧記』（注5）（1746年刊）を例に見ると、宿や村などを順に左方向に著し、立場や一里塚は印で示す便宜を図る。本文ははじめに距離、道の状態、荷馬の値段、問屋を挙げ、続いて道順に立場や宿、名所について道案内を主に簡単な解説を付す。この作品は和歌を収載するなど少し娯楽的な要素が見られるが、中心は立場、一里塚、駄賃などの実用的な内容である。このほかに1765年刊『東海木曾両道中懐宝図鑑』（注6）のように絵であらわす道中記もある。

(3) 絵図

遠近道印作・菱川師宣画『東海道分間絵図』（注7）（1690年刊）がある。大本五帖から成り、序文にある

ように、道中を図示するだけでなく鑑賞に値する風光の描写に配慮した点が先述の携帯用の道中記と異なる。

(4) 仮名草子

小説のなかで東海道の名所を案内する『東海道の名所記』(注8)(1661年頃刊、浅井了意作)がある。楽阿弥陀仏という僧が途中知り合った大坂の男と二人連れで東海道を上る旅の物語である。登場人物の設定と名所案内の方法を見てみる。

まず、次に挙げるのは主人公の僧侶の登場する部分である。

さて、世になし者のはて。青道心をおこして。楽阿弥陀仏とかや、名をつきて。国々をめぐり。後生はしらず、まず、今生の身過に、四国遍路・伊勢・熊野をめぐり。熊野浦より、大まハしのふねに便船して。浦々の名所／＼を尋ねとひ。(略)それより勸進聖になりて。めぐる、そのかた手に。あら／＼見物せばやとて。それより、こびき町の方へ行たれば。喜太夫が浄瑠璃其外、実か。うそか。異類異形のものを見る。そも／＼、浄瑠璃といふ事ハ。

このように名所案内が始まる。そして同行の男が登場する部分は次のようにある。

とかく又、これより、都かたへのぼりて。黒谷のあたりにもすまばやと。一所にも足をためず。しば口に立出たれば。年のころ。廿四五なる男。たゞ一人、刀わきざしハ腰によこたへけれ共。けたれてなまぬるき。色の白きひなおとこ也。しぶかみづゝミを、手にぶらさげて。楽阿弥がそばに立より。都へのぼる道は、これにて候や。御房も上り給ハゞ、御道づれにも、したまへかしといふ。(略)楽阿弥聞て、あらいとほしや、旅は道づれ世はなさけといふ事あり。(略)いざや道づれになり。道々かたりてのぼらんとて。うちつれ立てぞ、のぼりける

こうして二人連れの旅が始まる。そして終末は次のように記される。

搜神記の筆の跡を。思ひ寝にやしたりけん。汗水になりて。目をさまし。書とゞめぬ。そも／＼、楽阿弥陀仏とハ。何者にてありけるらん。顔も見しらず、行がたもしらず

最後はこの話を夢として筆を擱いているのである。ではこの設定のなかでどのように名所案内がされるのか、富士山付近の部分为例にあげる。まず「原とよし原とハ。まことに、富士山のふもとなり。山のかたちを、伊勢ものがたり。しほじりのやうにとかきたり。しほじりとは、なにの事やらんしらず。たぐひなき名

山なり。」という形で古典の表現に触れ、次に著者の表現で景観を描写する(「ことさら今ハ夏の空、四方の山々あをみどりにて。富士ひとつ、しろくあらはれ、たかく虚空にそびえたるは、いとけなき子の、おきなをかこみて立たるに似たり)。その後愛鷹明神の伝説や竹取物語のかぐや姫の話をかいつまんで述べ、最後に楽阿弥が「旅衣東からげのあしたかにすゆるやいとハふじ三里也」と狂歌を詠み、「かやうに、物がたりしつゝ。鶺鴒かひ川につく。」と次の土地に進む。このように楽阿弥の旅のなかで道中の名所旧跡が語られる形となっている。また挿絵のなかには常に楽阿弥、大坂男が描かれている。

4. 秋里籬島の名所図会と『東海道の名所図会』の制作について

続いて『都名所図会』以来の秋里籬島の名所図会の成り立ちと構成を確めながら『東海道の名所図会』の制作について考える。名所図会は先行文献や実地調査に基づく文章での解説と挿絵から成る。挿絵は主に寺社の俯瞰図と風俗画である。近世、京都では1658年刊『京童』(中川喜雲著)にはじまり、巡覧記や町鑑など多様な名所案内記が作られてきた。『都名所図会』は、先行書物のうち『山州名跡志』(1711年刊、坂内直頼著)や『山城名勝志』(1711年刊、大島武好著)という山城国の総合的な地誌を主な典拠としている(注9)。これらの地誌は、寺社や名所旧跡について、古典や記録類の関連記事を、出典を掲げ、原典に忠実な引用で蒐集している。籬島の名所図会は基本的にはこのような地誌の記述方法・内容を受けつつ、要約や改変を施して簡明化し、挿絵を取り入れて編集している。

以下は秋里籬島の名所図会の概要である。

- ・『都名所図会』大本6巻6冊。竹原春朝齋画。1780年、京都 吉野屋為八刊。
- ・『拾遺都名所図会』大本4巻5冊。竹原春朝齋画。1787年、京都 吉野屋為八刊。
- ・『大和名所図会』大本6巻7冊。竹原春朝齋画。1791年、京都 小川多左衛門・大坂 柳原喜兵衛等全4軒刊。
- ・『摂津名所図会』大本9巻12冊。竹原春朝齋画。1796/1798年、京都 小川多左衛門・大坂 柳原喜兵衛等全5軒刊。
- ・『和泉名所図会』大本4巻4冊。竹原春朝齋画。1796年、京都 小川多左衛門・大坂 松村九兵衛等全5軒刊。
- ・『東海道の名所図会』大本6巻6冊。竹原春泉齋等(北尾政美・石田友汀等)全30名画。1797年、京都 田

中庄兵衛・江戸 前川六左衛門・大坂 柳原喜兵衛等
全9軒刊。

先行する名所図会と『東海道名所図会』を比較すると、書物の形態や規模はほぼ同じである。異なる点は、これまで畿内の一国ごとであったものが『東海道名所図会』で初めて街道を対象にしたこと、これまで竹原春朝齋1名によって描かれた挿絵が、春朝齋の子春泉齋を筆頭に総勢30名によって描かれたこと、『都名所図会』では吉野屋1軒、後に京阪の数軒となった板元書肆が江戸も含む全9軒となり、最も大規模な制作と出版であったことが挙げられる。名所図会の企画と制作は著者に加え、板元書肆の力によるところが大きかったと考えられる。籬島による名所図会が大変よく売れる状況で、畿内各国のものが相次いで刊行された後、次の名所図会企画として東海道が対象とされたのではないだろうか。著者の籬島は『東海道名所図会』の執筆に際して、江戸までの実地調査を行ったことが図会中の著者の俳諧の詞書（「乙卯仲夏東関よりの帰路」）や、籬島の後の著作『木曾路名所図会』（注10）の記述（「七年のまへにはあづまへ赴き『東海道図会』をつづり」（1802年記）から知られ、これは1795年のことと推定できる。また『東海道名所図会』の著者の跋文は専ら図会の優越性を説いており、一つの図会の挿絵として当代の著名画家を含む寄合書を実現したところが、この図会の制作における大きな特徴だったと思われる。

5. 『東海道名所図会』の記述内容

では『東海道名所図会』の記述内容について、全巻を通して最も記述量の多い箇所の一つである富士山の例を見る。

まず、駿河・甲斐・相模にわたる位置、次いで『本朝文粹』から都良香「富士山記」を掲げる。これは「富士山は、駿河国に在り。峯削り成るが如し。直く聳えて天に属けり。(略)其聳えたる峯鬱りに起りて。見るに天際に在て。海中を臨瞰す。(略)頂上に平地有り。広さ一許里。其の頂の中央窪く下りて。体甌の如し。甌の底に神池有り。(略)」といった文章である。以下、和歌、漢籍における富士の記事（秦時代、徐福の伝説、『義楚六帖』・『史記』・『焦氏筆乘』）、『竹取物語』登天段、『伊勢物語』（塩尻の表現）、漢詩、古典の旅日記（『更級日記』『十六夜日記』）の描写、紀行文（『春の曙』等）、俳諧が列挙される。最後に著者の文章で新たな情報を加えつつまとめ（場所、富士山出現の諸説、外観、山の神（木花開耶姫）、『竹取物語』の故事、古人の作品伝や富士の牧狩、愛鷹明神の伝承）、「そもそも三国無

双の名山と賞し、『義楚六帖』および宗学士が日東曲にも褒めて蓬萊山と号くる所、紀の熊野、尾の熱田、この山なるべし。それが中にも最上にして、まことに我が邦の仙境、梅福九華真妃も出でざるは憾多き事なるべし。」と評している。挿絵には、富士山図（「吉原駅望芙蓉景」原在正画など）、風俗画、故事（かぐや姫）・歴史（牧狩）の画がある。

以上のように、大部分を古典や先行文献の引用が占める。漢文「富士山記」をもって山の外観の描写に代え、漢籍や物語、挿絵によって故事・歴史を紹介し、紀行文や和歌・俳諧などの韻文、富士山図に描かれた景観を鑑賞するように構成されている。

6. まとめ

最後に東海道に関する書物としての『東海道名所図会』の特徴と位置付けを考える。まず、名所図会中には紀行文のように著者の旅が描かれることはない。先に著者が実地調査に赴いたと考えられることを述べたが、籬島は図会制作の必要から情報収集（寺社の記録、現況、景観など）を行ったのであろう。またその際の著者の俳諧や狂歌は、挿絵のなかや他者の作品と並べる形で全体に散りばめられている。そして自らの旅は書かないものの、先行する他者の紀行文は景観の描写として多く取り込むこととしている。道中記と比較すると、駄賃のように旅中有効な実用的内容は見られない。籬島の名所図会はすべて大本数冊の形態で道中携帯するものではなく、『都名所図会』の凡例にあるように、居ながらにして名所旧跡を知ることができる、という類の本なのである。先行文献を取り込んだ点は『東海道名所記』に共通し、その手法は、『東海道名所記』では登場人物のある小説として、撰取した内容をすべて著者の文章のなかに収めており、『東海道名所図会』では先行文献の引用を蒐集した形のまま編集している。但し、籬島が先に出版された『東海道名所記』を参照していたことはあり得るが、先行文献を取り込むことについて『東海道名所記』の手法を変化させて出来たというようには捉えられない。『東海道名所図会』は、畿内各国で地誌をもとに作られていた名所図会の形式を東海道という場所に持ち込む経緯で制作されたものである。結果として、引用を羅列する方法により先行文献を多量に撰取することができ、実景を模写する正確な挿画を入れたこの作品は、東海道に関して最も充実した内容を持つ書物になったと言えるだろう。

注

1. 『日本名所風俗図会』17 (角川書店、1981年10月) 所収。
以下、引用はこれによる。なお、漢文は書き下した。
2. 『新日本古典文学大系』67 (岩波書店、1996年4月) によって引用。
3. 『新日本古典文学大系』98 (岩波書店、1991年4月) 所収。
4. 『近世紀行日記文学集成』1 (早稲田大学出版部、1993年2月) 所収。
5. 『道中記集成』第8巻 (大空社、1998年7月) 所収。
6. 『道中記集成』第11巻 (大空社、1996年6月) 所収。
7. 『叢書江戸文庫』50 (国書刊行会、2002年5月) 所収。
8. 東洋文庫346・361 (平凡社、1979年1月・9月) によって引用。
9. 拙稿『『都名所図会』『拾遺都名所図会』考』(『国文』97号 (2002年7月、お茶の水女子大学国語国文学会) 所収) に記す。
10. 『日本名所風俗図会』17 (角川書店、1981年10月) によって引用。

ふじかわ れまん／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 国際日本学専攻